その名は幸運

紫陽花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その名は幸運

【Ｎコード】
Ｎ１５０２Ｂ

【作者名】
紫陽花

【あらすじ】
生きるコトに疲れ始めてきたサラリーマンに突然の出会いが！

第一話：お疲れ様です

「なんだこの企画書は？　今までなにを習ってきたんだ！　来週までに全部やり直してきてくれたまえ」
部長の怒鳴り声がオフィスに響く。
僕はただひたすらに、すみませんと平謝りを続ける。
こんなのいつものことだ。
ガックリと肩を落としながら自分のデスクに戻り、大きな溜息をはいた。
それを見かねたのか右隣の木村先輩が話しかけてくる。
「まぁ元気だせって、俺も最初の頃はよく怒られたものだよ。それに部長は可愛いやつほどよく叱るんだよ。　ようは期待されているってことだ！」
どうやら励ましてくれているようだ。　木村先輩はいつもここって時に頼りになるとても尊敬できる人だ。
「どうだこれから一杯やるか？　もちろんおごるぞ」
こういう面倒見のいいところも尊敬できる一つの理由だ。
だが、お誘いを受けるわけにはいかない。
「すみません　これから残業しないといけないので…」
今の僕にはやらなければならないことが多すぎる。
「そうか残念だな…今度はちゃんと付き合えよ！　じぁあ、お疲れさん」
「お疲れ様です。」
木村先輩はポンと僕の肩を叩いて帰っていった。
そのおかげかどうかは解らないが、少し元気がでた…
―――――
時間がすぎるのは早いもので四・五時間ぐらい前に部長に怒られていたのが、つい先ほどの事のように思える。

とりあえず仕事も片付き、会社を後にする。
就職するために上京してきてもう三年になる……　色々とあったような　無かっようなそんな三年間、その間に自分は何か成長できたのだろうかと自分で自分に問いかける。
「グゥ～」
腹の虫がなった。
こんな時でも、腹はすくものだ。
「途中のコンビニによって弁当でも買って食うか」
そんな独り言を言いながらコンビニに向かった。
――――――――

「合計９８２円になります。」
「えっと……はい」
「１，００２円お預かりいたします。　２０円のお釣りです。　ありがとうございました。」
コンビニを出て行く僕
外は少し寒い、もうすぐ冬なのだと思うと何故か心が寂しい感じがするのは僕だけだろうか……　こんなことを考えながら帰る帰り道、気がつくと家のアパートに着いていた。
部屋が二階なので階段を昇ろうとした時、鳴き声が聞こえてきた。
「ワン」
あまりにも突然の出来事に一瞬気のせいかとも思ったが、すぐにまた鳴き声が聞こえてたので辺りを見回してみた。
そしてそれは僕の後ろの方でちょこんと座っている。
茶色い毛皮をまとい、赤い首輪をしてつぶらな瞳でこちらを見ていた。

第一話：お疲れ様です（後書き）

興味を持って見てくださいましてありがとうございます。感想や評価は喉から手がでるほど欲しいのでよろしければお願いいたします。

第二話：だから吠えるなって

ワンと甲高い声を上げて立ち上がり僕が手に持っていたコンビニのビニール袋に興味津々だ。
「なんだお前お腹がすいているのか？」
ワンと返事をする。
「そうかちょっと待ってろよ」
僕はビニール袋から弁当を取り出して半分わけてやった。
それをペロリとたいらげてワンと吠える。　おそらくもっとくれと言っているのだろう。
僕は渋々残り半分もくれてやる事にした。
腹が満たされたのか今度は僕に飛びついて来た。　多分、遊んでほしいのだろう。
しかし、こちらは残業までしてきたうえに部長に怒られて心身ともにボロボロだ。
だが、そんな思いを知るはずもなく必死に飛びついてくる。
よく見ると赤い首輪にはラッキーと書かれている。
「もしかしてお前の名前はラッキーって言うのか？」
ワンと返事をしながら飛びついてくる。
「じゃあ、お前は主人のところに戻らないと駄目じゃないか」
急におとなしくなるラッキーその背中からは哀愁が感じられる。
「何だ？　けんかでもしたか？」
僕の問いに無言のラッキー　どうやら図星のようだ。
「謝るなら早い方がいいぞ、そういうのは時間が経てば経つほど言い出しにくくなるからな」
クゥ～ンと鳴いて頭を垂れるラッキー　少し言い過ぎたかも知れないが、ここは心を鬼にして対処するべきだ。
じゃあなと言って階段を昇り左に曲がって、手前から二番目のドアの鍵穴に鍵を差し込んで回して引き抜く。

ドアノブに手をかけて回し、子供一人が通れるくらい開けた時、階段から疾風怒濤の勢いでこちらに向かってくるものがいる。
そいつは階段を昇りきり、九十度ターンを華麗に決めて僕に迫ってくる。
僕は襲われるのではないかと思い、身を固めたがそいつは足元を抜けて行き、ドアの隙間えと消えていった。
恐る恐る中を覗いて見ると、そこには尻尾を左右にフリフリさせるラッキーの姿があった。
「あのな、ラッキー　ここは動物を飼ったりしたら、いけないんだよ。　意味解るか？」
ワンと返事をするラッキー
「バカ　だから吠えるなって」
そう言いながらドアを閉める僕、どうやら鬼になりきれそうにない。
ラッキーはバゥと小さく返事をした。

第二話：だから吠えるなって（後書き）

興味をもってくださいましてありがとうございます。評価や感想がありましたらお願いします。

第三話：コロコロ

ラッキーが来てから僕は変わった。
正直、辞めようかすら思っていた仕事も、企画書がいくつかとおり部長に褒められてやる気がでてきたし、プライベートでも前から気になっていた経理の田中さんと二人で食事に行くことも出来て、今は良い友達関係を築けている。
そして、何かいいことがある度にラッキーにプレゼントを買ってきて、日に日にラッキーの私物が増えていった。
そんなこんなで、三カ月が過ぎようとしていたある日の日曜、ラッキーと近くの公園に出かけた。
この公園は一面芝生で真ん中に大きな木が生えていて公園というよりは広場に近い感じがする。
公園に着くと、家からもってきた野球ボールぐらいのゴムボールを僕が公園の端から思いっきり投げてラッキーが取りに走る、ただそれだけのことを何回も繰り返す。
でもそれが楽しくてしょうがなかっ。
しかし突然、ラッキーが戻って来なくなった。　心配になった僕は公園の真ん中、大きな木があるところまで行ってみる。
すると十メートルぐらい先にボールをくわえているラッキーがいて、小学校高学年くらいの女の子に泣きながら抱きしめられている。
ラッキーの気まずそうな顔が見えた。
僕は全てを察した。　来るべき時が来たのだと……
ラッキーは僕の姿を見つけると女の子の手を振りほどいて、ボールをくわえたまま駆け寄って来る。
僕はとっさに木の裏に隠れて、大きく二回深呼吸をした。
「来るな！」
僕は叫んだ。　一瞬、静寂が流れる。

ラッキーは歩みを止め、くわえていたボールを落とした。　そして、その場に立ち尽くす。
ラッキーとの距離はおよそ一メートルから二メートル程度だ。
ボールはコロコロ転がってちょうど僕とラッキーの間ぐらいで落ち着いた。

第四話：忘れ物

「良かったじゃないか……　本当の主人に会えたんだろう？」
ラッキーは無言のままだ。
「早く行ってやれよ　お前のこと今までずっと探してたんだろあの子」
ラッキーは黙ったままだ。
「早く行けってば！！」
僕は怒鳴ったが、ラッキーはそこから動こうとしない。
「お前がいなくなって清々するよ　本当の事を言うと迷惑だったんだよ！　ワガママだし、食費はかさむ、大家からは文句を言われる、　お前が来てから良い事なん、て――――――」
言葉は続かないのに目からは、しょっぱいものが途切れることなく流れ出る。
ラッキーは何も言わない。　もう嫌われただろうな、そう思った。永遠なんてないことぐらい解っていたのに、いつか別れの時がくることぐらい知っていたのに、そのための練習だって今まで何度もしてきたのに、好きという気持ちが、一緒にいたいという想いが胸の中から溢れ出して、言葉となって出ていきそうだ。
「ラッキーどうしたの？」
女の子がラッキーに駆け寄る。
深呼吸を一回だけして僕は覚悟を決めた。
「じゃあな」
それだけ言うと走り出す。途中、前がぼやけて何度も転びそうになったが何とか耐えた。
「ワオォーーーン」
ラッキーの遠吠えが聞こえる。　体中の細胞が僕の足を止めようと必死だ。
少しだけ覚悟がゆらいだが、振り返ることはない。

今が本当の心を鬼にして対処するべきところだと解っていたから……――――――

どうやって帰って来たのかよく覚えてないが、部屋に戻った僕はただじっと座って黒いままのテレビをみていた。
僕はテレビから目を離すことができない。
何故なら見えていたのだ僕には、ブラウン管から映るラッキーとの思い出が…
初めて逢った階段でのこと、仕事から帰ってきて玄関を開けたときのラッキーの姿、ラッキーに愚痴を聞いてもらっている僕の姿、そしてラッキーと別れたときのことが一つ一つゆっくりと映っていた。
気がつくとまた目からしょっぱいものが溢れて視界がぼやけた。
それを手で拭って夢から現実に戻される。
引っ越してきたばかりの頃は、狭い狭いと思っていたワンルームも今は何故か広く感じられる。
周りを見てみると僕の部屋なのに僕の物ではないものが異様に目立つ、それを見ているだけでまた視界がぼやけてきた……

あれからもう三年になる。
尊敬していた木村先輩は今度、また昇進するらしく僕はまだまだ足元にも及ばない。
今、僕の目標はいつか木村先輩の右腕として働くことだ。　まぁ何年かかるか解らないが……
プライベートでは、経理の田中さんと二年の交際のすえに結婚することが決まった。
そういえば最近、ラッキーが結婚式に来る夢をみて、もしかしたらなどという期待をしている自分がいる。
しかし、よく考えると今更どんな顔をして逢うつもりなのだろう

か、ありがとうの一言も言っていないのに……しかもあれだけ酷い事を言ったのだからラッキーは僕の顔すら見たくないだろう。
沢山あったラッキーの忘れ物もさすがに三年も経てば無くなる。
別に捨てたという訳ではなく今でも大切に押し入れの中に保管している。　というか捨てるに捨てられないだけだろう。　もし捨ててしまったらラッキーと過ごした日々が夢だったのではないかと思えてしまうから、僕とラッキーを繋ぐ唯一の物だから…

僕もいつか人の親になる日がくると思う。
その時は、動物と触れ合うことの楽しさや相手を思いやる優しさ、命の尊さなどを教えるために、真っ先にペットを飼って子供と一緒になって遊ぼうと思う。

名前はもう決まっている……幸運だ。

第四話：忘れ物（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。　ついでに感想や評価などをしてもらえると嬉しく思います。　迷惑かもしれませんが、これから頑張りますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1502b/

その名は幸運

2010年10月11日11時10分発行